
白き小鳥たちは歌う

文樹妃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白き小鳥たちは歌う

【Nコード】

N6159G

【作者名】

文樹妃

【あらすじ】

遙か昔、天地に神々が暮らしていた時代の、悲しい恋物語。神話の世界をイメージしています。「春・花小説企画」参加作品です

(前書き)

「春・花小説企画」参加作です。

「春・花小説」のキーワードから検索、またはバナーから企画サイトへ飛んでいただくと、他の方々の作品も読めます。

深い森の中、一人の女神が座り込み、花を摘んでいる。

長く美しい金髪は日差しをあびてきらきらと光を放ち、澄んだ緑色の瞳は優しく瞬いていた。

赤や白、黄色に薄紅、水色と、様々な色彩とその姿で楽しませてくれる花たちに微笑み、彼女は歌う。

鳥が鳴くかのような優しい歌声に、花すらも聞き入っているようだった。

「ねえ、アリウム。あなたも来てごらんさいよ。花たちの美しいこと！ だから私、春って大好きなの」

歌うのをやめた彼女は、そう言っただけでそばに佇んでいた青年に手招きをする。

アリウムと呼ばれた青年も、年若き神だった。

彼女の瞳と同じ色の草を優しく踏みながら歩み寄ると、白銀の長髪を肩に流して、アリウムは笑う。

「いいや、花よりも君のほうがもっと美しいよ、カレンジュラ。それに君の歌を聞いているほうが、花を見るよりも楽しいんだ」

愛しげに彼女を見つめる紫の瞳に、女神カレンジュラは戸惑ったように視線をそらす。

「何を言っているの、いやね。冗談ばかり」

細い指で野原に咲く花々を摘んでいきながら、カレンジュラはアリウムの眼差しから逃れるように立ち上がった。

色とりどりの小さな花たちが、カレンジュラを追うように風に揺れる。

「カレンジュラ、なぜ逃げる？ 冗談なんかじゃない。僕の心は知っているはずだ」

すり抜けようとした彼女の手首を捉えて、切なげにカレンジュラの髪に触れ、口付ける。

カレンジユラは体を震わせたが、熱情のあふれる紫の瞳に捕らわれたように動かなかつた。

アリウムは華奢な彼女の体を抱きしめようと腕を伸ばす。

けれどカレンジユラは愛しげに触れようとする手から、遠ざかるように体を引いた。

「いけない。私はもう、明日にはこの森を出ていく身よ」

静かに、それでも強い調子で言い、見上げてくるカレンジユラの視線を、アリウムは苦しげに受け止める。

「わかつてる……ルピナスに嫁ぐって言うんだらう。あんな奴！」

「……優しい人だわ」

憎々しげに吐き捨てたアリウムの声に、カレンジユラが答える。

その緑の瞳に悲しい光が宿っているのを、アリウムは見逃さずに唇を噛んだ。

「大神殿のえらい奴だっただけだらう。いや、だからこそ君の父上が逆らえなかつた。君だって本当は」

耐えられずに言い募るアリウムから瞳をそらし、カレンジユラは両手で耳をふさいだ。

「やめて！」

鋭い一言にアリウムは言葉を止める。

立ち尽くす彼に背を向け、カレンジユラは言った。

「……やめて。言ったって、もうどうにもならないことだわ」

「……カレンジユラ！」

そのまま立ち去ろうとするカレンジユラの儂げな背中を、アリウムが呼び止める。

「嫌だ！ 君を他の奴に渡すなんて耐えられない！ 君が好きなんだ、愛している！ もうずっと、ずっと前から君だけを」

ついに抑えきれなくなつた感情を爆発させて、アリウムが叫ぶ。

しかしその声からも逃げるように、カレンジユラは駆けていく。

摘み集めた花束で顔を覆って、涙が誰にも見えぬように隠し通して、駆けていく。

アリウムの紫色の瞳は、深い絶望に覆われようとしていた。

「どうしても手に入れたいのかい？」

足元から突然聞こえたかすれ声に、アリウムは弾かれたように顔を上げる。

どうにもならない苦しみに、一人膝を折っていた時のことだった。黒い蛇が、彼の足元に静かに鎌首をもたげていた。

「もちろん。彼女を失うぐらいなら、死んだほうがましだ」

心底からそう言ったアリウムに、蛇がしゅうしゅうとまるで笑っているような声を出す。

「それなら簡単なことさ。心のままに、手に入ればいい。夜明け前に彼女を連れ去り、遠くへ行ってしまうばいいのさ。誰にも見つからない遠くへね」

老女のようなしわがれ声は、まさしく黒い蛇の口から聞こえていた。

アリウムはその蛇の正体を知っていた。

誰かの迷いにつけこみ、惑わせようと現れる悪魔　黒きニゲラと呼ばれるもの。

しかしそんなことは今の彼にはどうでもよかった。

蛇の言った考えに、みるみるうちに瞳を明るくしていく。

「連れ去る……そうだ。そうすればいい」

一体なぜ今までそんな簡単なことに気づかなかったのだろう、と呟き、アリウムは立ち上がる。

ニゲラの声に耳を傾けた者には破滅が待っている　その恐ろしい伝説を、知らないはずはなかったというのに。

「そうだ、連れ去ってしまえ。ルピナスが何だというのだ。大神殿に混乱をもたらせ！　自らの愛を選べ！　愛しい者をその手に！」

ひどく低いような、高いような、不思議な声の大群がまるで怒涛

のようにアリウムを襲う。

黒い蛇は彼の足に巻きつき、体中を這い、いつの間にか消えていた。

「……愛しい者をこの手に」

呟き、再び開いた紫の瞳は、不思議なほどに澄み、そしてどこか狂気に似た光を秘めていたことを、アリウムは知る由もなかったのだ。

夜明け前、カレンジュラの眠る神殿にアリウムは忍び込んでいた。白き大地の女神が統べる、聖なる場所。清涼な空気が流れる、冷たい石の空間。

幾人もの女神たちが休む中、目指すカレンジュラは一番奥の一室にいた。

嫁いでいく女神だけが着ることを許される、純白の衣装に身を包んで。

前夜に汚れなき体でこの衣装を着て、夫となる神のもとへ向かうのがしきたりだということは、アリウムもよく知っていた。

その白い色はカレンジュラによく似合うだろうと、自分の花嫁となってくれる姿を夢に描いたものだった。

しかし彼女は今、他の男のためにこの衣装を着ている。

そのことに火のついたように嫉妬心が燃え上がる。

「カレンジュラ」

決意を込めて、耳元でその名を呼んだ。

一瞬身じろぎしたカレンジュラは、うっすらと緑の瞳を開いたかと思うと、目の前に佇むアリウムに驚き、声なき悲鳴を上げた。

「アリウム！ どうして……なぜこんなところへ……！」

無意識なのか、首を何度も横に振りながら、カレンジュラは混乱した様子でアリウムを見つめる。

彼女の驚愕も、戸惑いも、何もかもが自分の行動を喜んでい
だと、アリウムは思った。

「なぜつてももちろん、君を迎えに来たんだよ、カレンジユラ」

自信に満ちた瞳で微笑み、アリウムは言う。

「迎えに、ですって？」

顔色を変えたカレンジユラの白い頬に、アリウムはそつと手を伸
ばす。

今度こそ触れようとした温もりは、また彼から離れていった。

「何を言っているの、アリウム！ あなた、正気なの？ ルピナス

に 大神殿の神々に逆らうことは、私たちにとっては死も同じ。

私たちだけではないわ、お父様も、お母様だって」

何をされるかわからないのだから、と必死で訴えるカレンジユラ
の声にもアリウムは耳を貸さなかった。否、貸せなかったのだ。

姿こそ見えないものの、先ほどの黒い蛇がまだ巻きついているよ
うだった。

手にも足にも、首元にまで。

熱く燃えたぎるような自分の恋心が、何十倍にも、何百倍にもな
って彼自身を焼いているようにすら感じる。

「もう何もかもどうでもいい。カレンジユラ、君を手に入れること
以外には」

そう、誰か他人の声があったような気がした。

アリウムの言葉にカレンジユラは悲痛なほどに真っ青になってい
た。

「……アリウム、あなた……！」

何かを言おうとするカレンジユラの体ごと抱き上げ、連れて行く。
叫び、泣く彼女の声もどこか遠く、甘い囁きにしか聞こえない。

アリウムは窓の外に待たせていた天馬に跨り、そのまま神殿を後
にしたのだった。

小さく瞬く星々と、白い月がまだほの暗い世界を照らしている。追っ手がすぐさま放たれるも、ニゲラの力を借りたアリウムの天馬は、彼らの追いつけぬほどの速さで空を駆けた。

「アリウム、アリウム待って！ お願い、思いとどまってちょうだい！　こんなのためよ　間違ってるわ！」

何度も何度も彼を説得しようとするカレンジユラを、アリウムはただ嬉しそうに見つめるのみだった。

「ああ　カレンジユラ。こうして君をこの手にする日を、どんなに夢見たことか」

うつとりと彼女の髪に顔を埋めるアリウムに、カレンジユラはもう何を言っても無駄であると悟ったように、静かになった。

風にはためく彼女の純白の衣装、汚れなき乙女の証明。

他の男に渡さずにすんだことを、アリウムは心から喜んでいた。

自らの白銀の髪を、潤んだ瞳でカレンジユラが見つめていたことなど知らずに。

「……ねえ、アリウム」

そうしてしばらく走った頃、カレンジユラが彼を呼んだ。

静か過ぎるその声に秘められた想いに気づかずに、アリウムは微笑む。

「なんだい、カレンジユラ」

「見て　下に広がる大地を。あの美しい草木と、花々を」

遠い地上をも見透かす瞳で、カレンジユラは言った。

「私たちの暮らす場所は、あんな風に美しい場所ならいいと、ずっと夢見ていたわ」

雲の隙間から垣間見える緑の大地を指し示して、微笑む彼女。

愛らしいカレンジユラが微笑んでくれるのなら、とアリウムは天馬を操った。

「それならば、あそこで暮らそう　もう誰にも邪魔されることはない。ずっと僕たち、二人きりだ……」

やっと手に入れた安息の地と愛しい人。

アリウムは心からほっとしたようにカレンジユラを緑芽吹く大地へと下ろす。草原をそっと踏みしめ、カレンジユラは笑った。

「ええ、そうね……」

震える声で答えた彼女を、万感の想いを込めて抱きしめる。

月光がきらめく彼女の金髪を引き立たせる。今まで見たどの瞬間よりも、美しいカレンジユラだとアリウムは満足げに微笑む。

「私ね、アリウム。あなたの白銀の髪が好きだったわ。その美しい色に似た純白の花嫁衣裳を、あなたのために着る日を本当に夢見ていたのよ。」

優しい優しい声で、カレンジユラが告げる。

信じられないほどの幸福に、アリウムは輝くカレンジユラの髪を撫でた。

その刹那、だった。

一瞬ゆるんだアリウムの腕から抜け出したカレンジユラが、月光に手を差し伸べる。

静かに流れた涙が、大地に落ちる。

途端、彼女の体が吸い込まれるように緑の大地へと消えていくのだ。

「カレンジユラ！」

何が起こったのか、あまりに突然のことで目を瞠るしかできないアリウムの前で、カレンジユラは消えた。

長い金の髪が春の夜風に舞ったのを見たような気がして　次の瞬間には、しゅるり、と白いものだけが落ちていた。

駆け寄り、拾い上げたものは純白の花嫁衣裳。

アリウムの手からも零れ落ちていく白い布は、一瞬のうちに風に舞い上がり、地面から伸びてきた木にからまり、そしてたくさんの花になった。

真っ白な、汚れのない色をしたその花は、まるで数十もの小鳥たちが一斉にその木に舞い降りたかのようにだった。

「カレンジュラ、カレンジュラ　どこへ行ったんだ！」

呪縛から解き放たれたように声をあげ、必死で捜し回るアリウムの前に、再びカレンジュラの姿が現れることはなかった。

アリウム。

ふと呼ばれたような気がして、見上げた先には小鳥のような白い花。

「……まさか、カレンジュラ　！」

嘘だ、と悪夢でも見ているかのような顔で駆け寄ったアリウムが、硬い木の幹に触れる。

その瞬間、優しい歌声が響いた。

愛しい、愛しいカレンジュラの　澄んだ歌声。

許して、アリウム。私、お父様やお母様を裏切ることはできない。けれどあなたを……これほどに愛してくれるあなたを置いて、嫁ぐこともできない。

だから私は、と声はアリウムの耳元で囁いた。

白銀の髪 of 青年は、全ての力が抜け落ちたかのように、泣き崩れた。

*

深い森の中、老人は語る。

長い長い白髪と髭は皺の刻まれた顔を覆い、若かりし頃の面影を

思い描くこともできぬほど。

けれどそんな姿を恐れることもない子供らが老人の膝元に集まり、優しいしわがれ声に耳を傾けていた。

鳥たちも麗らかな春を謳歌するかのように歌い、彼らのそばを飛び回った。

語り終えた老人に、子供らはほうつと息をつく。

「悲しいお話　ねえ、それでアリウムはどうなったの？」

一人の少女が、自分のことのように表情を翳らせて訊ねた。

「さあさな。愛する人を失って嘆き悲しんだとは言われておるが、その後の彼の行く末を知る者は、誰もおらんそうじゃよ」

「わたしは、花になったカレンジュラのそばですつと暮らしたと思っわ」

「うっん、きつと悲しくて旅に出たのよ」

「違っわよ、大神殿の神様に捕まって、罰せられたんだわ。それともニゲラの呪いで死んでしまったのかも」

あれやこれやと好き勝手なことを言う少女たちに、老人は笑った。

「ねえ、長老様、もっとお話して」

「そうよ、そうよ。もっと聞きたい！」

たちまち先ほどの話など忘れたかのようにせがむ少女たちを、少年長の少年が止める。

「こら、ディモルフオセカ。長老様がお疲れだろ？　今日はもうこれでおしまいだ」

「だつて……」

なだめられても唇を尖らせる少女を、老人がそつと撫でた。

「また明日おいで。こんな老いばれの話でよければ、いくらでも話してやるとも」

「うん！　わかった。じゃあ長老様、また明日ね！」

元気に駆けていく少女の後姿を見送り、老人は少年に顔を向けた。
「ラクスパー、君は面白かったかね？」

少女たちより年長だとはいえ、本当は誰よりも熱心に耳を傾けて

いたから、ラクスパーは気恥ずかしそうにしながらも頷く。

すると、皺くちやの顔で優しく笑った老人が、彼に言った。

「好きな子のことは、大切にやりなさい。そうしないと、アリウムのよう後悔することになるぞ？」

冗談めかして囁かれ、ラクスパーは驚いたように頬を染める。

しかし静かな老人の表情をしばらく見つめると、素直に頷き、少女たちの後を追った。

デイモルフオセカに並んで歩き出す彼を、老人は優しく見守っていた。

子供たちが森から出て行くと、老人は黙って立ち上がり、ゆっくりゆっくりと草を踏みしめ、歩いていく。

森の高い木々が開けた場所へやってくると、老人はやわらかな緑の大地に腰を下ろした。

そばには一本の大きな木が立っていて、根元には白い大きな花びらが散っている。

「今年もたくさん咲いたな」

一人呟き、老人は見上げる。

たくさんの白い小鳥のような花々が、暖かな風に黙って体をまかせている。

「君はいつまでも変わらないのか。僕一人を置いて、そうやって安らかに微笑むのか」

皺だらけの手で、木の幹にそっと触れて、老人は言う。

答えを求めているようでもあり、全てを悟っているかのようにもあつた。

「女神の慈悲など、いらないうちに 君のいない永遠など、無意味でしかないというのに」

呟き、苦しげに吐息をもらす老人の、老いた手がいつしか滑らか

な若者のそれに変わっていく。

白く、長い髪は白銀に、皺に埋もれ、見えもしなかった瞳は紫の美しい色を見せる。

「こうして誰かと時を過ごさなければ、狂ってしまいそうなほどの長い時を　愛する君を失って、気が遠くなるほどの悲しみを永遠に味わい続けるのが、僕の罪に対する答えなのか」

違う。カレンジュラのせいではない。

問いながらも、自分でわかっていた。

白き大地の女神は、愛し子を奪った罪を許しはしなかった。

神々の世界から永遠に追放し、無限の時をこの地上で過ごせと。

花になった愛しい人を見守り続けるのが、お前のせめてもの罪滅ぼしだと。

そう言っているのだ。

もはや、自分が神であったことなど夢のようで、忘れてしまいそうになる。

そのたび、本当の姿を思い出させ、こうして戒めるのだろう。

全ては、自分の罪。

あの日ニゲラの声に負けた、自分自身の弱き心のせいなのだ。

ああ、けれど……僕はこうして永遠に君と一緒にだ。

紫の瞳から、涙が零れ落ちる。

「愛しているよ……カレンジュラ」

静かに触れた幹は冷たく、決して何も伝えてはこない。

けれど確かに白い花たちの歌声を、聞いたような気がした。

(後書き)

読んでいただき、ありがとうございます。

お話に出てきた神や人の名前は全て花の名前です。

以下、花と花言葉を記載しておきます。

カレンジユラ（哀愁、悲痛、悲嘆、別れを悲しむ）

アリウム（無限の悲しみ）

ニゲラ（ひそかな喜び、当惑）

ルピナス（あなたは私の心に安らぎを与える）

デイモルフオセカ（元気）ラクスパ（信頼、軽快）

また、カレンジユラが姿を変えた花には「白木蓮」をイメージしています。花言葉は「自然への愛、持続性」です。

出典は企画サイト花言葉一覧に紹介したリンク先と、以下のURLです。

<http://www.pepian.com/efcitka>

.html

<http://www.hana300.com/hakumo>

.html

以上、解説でした。

「春・花小説企画」楽しんでいただけたら幸いです。

どうぞたくさん小説を読んでいただき、ご感想等よろしく願います。

拙作にも何でもコメントお寄せいただけると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6159g/>

白き小鳥たちは歌う

2010年10月8日15時29分発行